

北魏洛陽城の規模について

森

鹿

三

は し が き

北魏の洛陽城に關しては、酈道元の水經注特にその穀水篇

や陽街之の洛陽伽藍記の如き北魏の當時に在世しこの國都を

實見した人の記録が今に傳えられており、又簡略ながら古洛

陽城を實地踏査したホワイト師の報告(W. C. White, *Tombs of Old Lo-yang, Shanghai 1934*) もあつて或程度その規模

を明らかにしうるのである。しかし具體的にこれを地圖上に

示すことはやはり困難と思われるのであつて、なお多くの假

説を積上げる必要があるようである。そこで本稿において

も、北魏洛陽城の城郭或いは城門、更にその内部にある大

廟、大社、宮殿、園池、官署、寺塔、邸宅などを一定の位置

に固著させる、地味な歴史地理本來の工作は暫くおいて、も

つと粗大な事項を取上げ、そこから導出せる若干の課題を考
え、できうるならば中國首都史上においてこの都城の占める
意義を指摘してみたいと思う。

今粗大な事項と言つたが、それは北魏の洛陽城に城と郭、
換言すれば内城と外城とが存在したという事實をさすのであ
る。誠に粗大な事柄であつて、讀者諸氏はそのあまりにも初
歩的な出題に驚かれるであらう。實際、前述の洛陽伽藍記を
通覽すれば直ちに氣づかれる事柄であるから、北魏洛陽城に
關心をもつほどの者は誰人も内外城の存在を確認しているは
ずなのである。しかるにどうしたことか、今までの研究者の
中、一二の人を除いて殆どすべての人がこのことに注意を拂
つていない。近頃、前掲の諸資料を驅使して精密な考證を重
ね北魏洛陽城圖の復原を試みた勞幹氏の如きも内城より擴延

された外城を確認しなかつたために、折角の苦心作が實り少いものになつてしまつてゐるのである。だから誠に初步的な事柄ではあるが、北魏洛陽城に城と郭、内城と外城のあつたことを再確認することは現在に於てもなお決してむだではなからうと思われる。更には從來この初步的事實を輕視い無視していたために見逃されていた新事實を發見しうる端緒を提供することにならぬとも限らない。そういう期待を胸に描きながらこの初步的事實をまず明らかにすることにしよう。實をいうと、このことに關しては前掲の勞氏の研究の梗概を紹介し若干の批評を加えた時にも既に言及しているので、些か重複の嫌はあるが、お許しを願つておきたい。

一體、北魏の洛陽城は孝文帝の太和十七年（四九三）に造營に着手し翌々年舊都平城山西大同より遷都したものであるが、もともとこゝは紀元一世紀初から四世紀初までの三世紀間、後漢曹魏西晉とうけつがれた舊首都であつた。その規模については、晉の皇甫謐の帝王世紀（續漢書郡國志劉昭注所

引）に

城東西六里十一歩。南北九里一百歩。

とあり、晉元康地道記（同じく劉昭注所引）にも

城内〔南北〕九里七十歩。東西六里十歩。

と見えてゐる。ほゞ南北九里、東西六里で、そのため俗に「九六城」と呼ばれたといふ。^⑤北魏孝文帝がその華化政策を行う本營として選んだものであるから、その規模も全く漢魏晉のそれを踏襲したものであつた。そのことは城門の名稱ならびにその位置をみてもわかるのである。洛陽伽藍記の序によると、北魏洛陽城の東面には三門あり、その北頭の第一門を建春門というが、これは漢の上東門であり魏晉では建春門といつた。孝文帝はこの魏晉時代の舊名を踏襲して改めなかつたのである。建春門の次南の門を東陽門というが、これは漢の中東門、魏晉の東陽門である。次南を青陽門というが、これは漢の望京門、魏晉の清明門である。南面には四門あり、^⑥東頭第一門を開陽門という。これは漢魏晉ともに同一名である。次西を平昌門といい、漢の平門、魏晉の平昌門である。次西を宣陽門といい、漢の苑門、魏晉の宣陽門である。更に

西の門を津陽門というが、これは漢の津門、魏晉の津陽門で

面 北		面 西				面 南				面 東			北 魏 晉 後 漢
廣 莫 門	大 夏 門	承 明 門	闔 闔 門	西 陽 門	西 明 門	津 陽 門	宣 陽 門	平 昌 門	開 陽 門	青 陽 門	東 陽 門	建 春 門	
同	同	な	同	西 明 門	廣 陽 門	同	同	同	同	清 明 門	同	同	
上	上	し	上	門	門	上	上	上	上	門	上	上	
穀 門	夏 門	な し	上 西 門	雍 門	同 上	津 門	苑 門	平 門	同 上	望 京 門	中 東 門	上 東 門	後 漢

ある。西面にはやはり四門が開かれていて、その南頭の第一門を西明門というが、これは漢魏晉とも廣陽門と稱したのを、孝文帝が西明と改めたものである。次北を西陽門というが、これは漢の雍門、魏晉の西明門であつて孝文帝の改稱したもの。次北を闔闔門というが、これは漢の上西門、魏晉の闔闔門である。更に北の門を承明門というが、この門だけは漢魏晉の故都になかつたものである。次に北面へ廻ると二門あり、西頭を大夏門というが、これは漢の夏門、魏晉の大夏門である。北面東頭の門を廣莫門というが、これは漢の穀門、魏晉の廣莫門である。以上北魏洛陽城四面の十三門の名稱を漢魏晉のそれと對照すれば上表の如くなる。

城門名を踏襲したと同じく城門の位置も前代と殆んど變化なかつたようである。たゞ水經注によると西陽門の位置を少しく北に移して東陽門と相對するようになったといひ、又同じく西面の闔闔門の位置を少しく南に移したという。このように西面の二門のみが、太和遷都に際してその位置が移動されているのは何等かの原因がなければならぬ。その一つの原因としては、前述の承明門が北魏の時になつて始めて開かれ

たことが注意に上るであらう。從來西面には三門が開かれていたのが四門になつたために、各門の間隔を考慮してかくの如き移動を行つたものと思われる。しかし大局からいって、城門の名稱もその位置も魏晉時代のそれを繼承したものと考えられるのであつて、このことから北魏の洛陽城が漢魏晉の九六城の規模を踏襲したと推測するのは、あながち無謀ではなからう。

北魏洛陽城が東西六里南北九里の規模をもつていたことは上述した所からほぼ確實と推測しうるにかゝわらず、こゝに一見之と矛盾する記載がある。それは洛陽伽藍記の最後に、
京師東西二十里。南北十五里。

と見ゆるものであつて、これがもし北魏洛陽城をさすものとするれば、一體如何に理解すべきであらうか。勞氏はこの兩者を同一とみて伽藍記にいう里に對し空前の新解釋を提出したのである。^⑦しかしその誤解であることは既に前稿で指摘しておいた。それよりもむしろ河南志の著者が^⑧

陽街之増廣而言者。蓋兼城之外也。

と事もなげにいつている方が正しいのである。即ち兩者里數

の不一致は對象の相違から來るのであつて、伽藍記に里數を増廣——東西に於て十四里、南北に於て六里——していうのは、城外をも含めているのだらうとするのが事實に近い。河南志の著者がかゝる想定をしたのは九六城の外に郭が作られた事實、詳しくいえば、太和遷都より六年後、宣武帝の景明二年（五〇一）に畿内の人夫五万五千人を徵發して京師三百二十三坊を築いた（魏書世宗本紀）という事實をふまえての立言である。なお、この市域擴大ならびに區劃整理事業は、當時司州の長官であつた元嘉の奏請によるものである。その概要は魏書廣陽王嘉傳に見えてゐるから引用しておこう。

於京四面、築坊三百二十。各周一千二百步。乞三正復丁。以充茲役。雖有暫勞。姦盜永止。

ともかく北魏の洛陽城は漢魏晉の所謂九六城を繼承すると共に、それを内城として更にその四面を擴大し舊城の五倍に及ぶ外城を設定したのである。尤も從來とても城外殊に城門外の街道に沿つては聚居も見られたことであらうし、城の西南には大市（一名金市）城東には馬市、城南には陽市或いは羊市の如き市場の存在したこと（太平寰宇記に引く洛陽記）

も知られているのであるから、全くの村落田野ではなかつた。しかし城外の地はやはり城外であつて、都城區域として意識されず都城としての設備もなされていなかつたようである。それに對して北魏の洛陽城の場合は、計劃的に坊を築きしかも各坊の周りを各々一千二百歩と規定している。坊を正方形と假定すればその一邊は三百歩即ち一里となる。京師東西二十里南北十五里にかゝる坊を築くとすれば三百坊が得られるわけである。魏書に三百二十三坊或いは三百二十坊という數字に少し疑問はあるが、ともかく洛陽城外には、一里毎に道路を設け基盤の目の如く整然と區劃せられた有様が想見される。なお洛陽伽藍記によると、さきの「京師東西二十里南北十五里」につづいて、

戸十萬九千餘。廟社宮室府曹以外方三百歩爲一里。里開四門。門置里正二人吏四人門士八人。合二百二十里。

とあつて魏書の記述と相疏證することができる。こゝに里とはさきに坊と稱したものであり、その面積が方三百歩であることはさきに周各一千二百歩というに當る。そしてこの里即ち坊の四面には夫々門を開いたというから、坊内には十字狀

に交叉する縦横の道路があつたであらう。あたかも我々の住む京都に條と條との間に坊門と稱する道路がある如くであつたらう。そしてこの坊門には夫々里正二人、吏四人、門士八人が配置されていた。さてかゝる里が伽藍記によれば二百二十あつたというが、これはさきの魏書に三百二十或いは三百二十三と記すのとあまりにも差が大きすぎる。魏書の數字はさきにも疑いを存しておいたように少しく多いし、伽藍記の方は恐らく太廟、太社、宮殿、官署を除外しての數字であらうがそれでもやはり少な過ぎるようである。いずれが正しいか決定し難い問題であるが、兩者共に勞氏が提出した新解釋の如く舊洛陽城内の坊里の數を指しているものではなく、六世紀初に城外をも市域に編入して整理擴充した大洛陽城の坊里の數を述べていることだけは疑いを容れる餘地がないであらう。

二

上述した所によつて北魏の洛陽城に漢魏晉、三世紀間に互る舊城を踏襲した内城と六世紀初頭に擴延した新城即ち外城

の存在したことが確認されたと思うが、それでは外城は内城に對して如何なる位置關係にあり、また如何なる地域まで包含したのであらうか。

一體北魏の洛陽城は現在の洛陽縣城の東方十數キロの地にあり、北には芒山を負い、南は洛水に臨んでいた。そして芒山と洛水の間の距離が十五里であつたことは伽藍記 卷四城西に

自退酤里以西。張方溝以東。南臨洛水。北達芒山、其東西二里。南北十五里。竝名爲壽邱里。皇宗所居也。民間號爲王子坊。

と述べていることによつて明らかである。それで京師南北十五里というのは、洛陽の自然環境に照らして尤もな規模であろう。従つて舊洛陽城が帝王世紀にいう如く九里百歩とすれば、外城は内城に對し南北において五里二百歩擴張されたわけである。伽藍記 卷三城南には

宣陽門外四里。至洛水上。作浮橋。所謂永橋也。

とあつて、城の正南門である宣陽門から京師の南を劃すると思われる洛水まで四里あつたことがわかる。そこには永橋と

稱する浮橋があつた。河南志に引く河南郡縣境界簿には内城南面より浮橋まで五里という。すると城北には一里二百歩もしくは二百歩延びたことになる。東晋の郭緣生の述征記（文選潘安仁河陽縣詩注に引く）には

北芒去大夏門。不盈一里。

とあつて、城の北面には芒山が迫つていてその間一里にも満たぬ形勢だといつているのであるから、境界簿の説に従うべきであらう。ともかく城北へ如何ほど擴張されたかは不明であるが、地勢上平地の餘裕は少なかつた。事實、伽藍記の卷五城北をみて、大夏門外の禪虛寺と廣莫門外の凝圓寺と僅かに二寺を記すのみで、他卷の如く十數寺を列舉するものとは全く趣を異にする。内城の南北面から外城の南北面までの精密な距離は確定できないが、内城が外城に對してよほど北寄りの位置を占めるに至つたことがみとめられる。それは後ほど改めて取上げることにして、伽藍記にいう京師南北十五里とは大體洛陽の形勢より觀察して芒山から洛水までを指すものとみて大過ないであらう。

次に京師東西二十里は如何であらうか。伽藍記 卷二城東に

崇義里東有七里橋。以石爲之。中朝時杜預之荊州。出頓之所也。七里橋東一里。郭門開三道。時人號爲三門。離別多云。相送三門外。京師士子。送去迎歸。常在此處。

と述べる所によつて、城東七八里の邊に郭門が構築されてゐたことが確認される。崇義里は内城東面北頭の建春門より東出する御道の北にあつたから、この郭門は建春門に應ずる東郭の門であつたらう。また郭門というからには、その邊に外郭即ち羅城があつたのであらう。京師外廓の門としては、ただこの城東の郭門のみが記録されているだけであるが、ともかくこれによつて、外城の規模、特に東方の限界が知りえられるのであつて、伽藍記のこの記事は極めて貴重なものといわねばならない。

この外城東面の郭門に對應するものを西方に求めると、同じく伽藍記卷四城西に

出閭闔門。城外七里長分橋。中朝時。以穀水浚急注於城下。多壞民家。立石橋以限之。長則分流入洛。故名曰長分橋。或云晉河間王在長安。遣張方征長沙王。營軍於此。爲張方橋也。未知孰是。今民間語訛。號爲張夫人橋。朝士送

迎。多在於此。

とあつて、さきの郭門が去るを送り歸るを迎える場所であるのに呼應して、西方ではこの長分橋が送迎の場所になつてゐる。郭門の存否は明らかでなく、恐らくなかつたのでないかと思われるが、その機能の同一よりみて長分橋が外城の西の限界を示すものの如くである。この橋が張方將軍の故事によつて張方橋ともいわれたというから、さきに引用した王子坊の記事中に見える張方溝はこの橋のかゝつてゐる溝渠であつたと思われる。そしてこの溝渠は同時に京師の西界をなすものであつたらう。又この張方橋が内城西面の北頭第二門である閭闔門外七里というから、西郭は内城西面より七里の距離にあつたわけである。内城の東西は帝王世紀によれば六里十一步であるから、外城は内城を中心にして東西に七里ずつ擴延されたわけである。

以上洛陽伽藍記の記載にもとずいて外城の規模を考えたのであるが、その結果南北に於ては自然境界に従つて北は芒山より南は洛水まで、東西に於ては郭門の線より張方溝までであつたことが明らかにされた。東西には自然境界がなかつた

ので西では穀水と洛水とを連結する溝渠を利用し、東だけに恐らく郭を築いたのではなかつたろうか。そこでこの東西二十里南北十五里に及ぶ市域を伽藍記では如何に呼んでいるかという点、これを洛陽城とはいわず京師と呼んでいるのである。また伽藍記の最後には、北芒山上の馮王寺を始め嵩高山の諸寺或いは龍門の石窟寺等十四寺の名を列挙した後此の如きの寺は郭外であるから詳載しないというが、これら郭外の位置を京東、京南と呼んでいて、外城即京師なるを知る。人爲的な築造物としての郭壁については記していないが郭即ち京師の區域觀念は明瞭である。ともあれ洛陽伽藍記が今に傳えられていたために、内城と外城、城と郭の存在、京師の規模とその洛陽城に對する位置關係などが或程度判然としたわけであつて、今更ながらこの書の價值高きことが感ぜられるのである。

三

漢魏晉の都城を踏襲した北魏洛陽城が四面に擴延するに當つて、南北に於ては地形の制約のためにあまりのびられず、

殊に北方に於ては芒山が内城北面に近接して連互するため、僅か一里内外即ち四、五百メートルしか外城區域がとれなかつたのに反し、東西は平衍な地勢であるため十分に擴延された。そのため内城は外城に對して中央北寄りに位置することになり、かつ内城が縦長であるのに對し、大洛陽城は横長の形態をとるようになったのである。この形態は後に隋の大興城即ち唐の長安城でも採用されている。北魏大洛陽城と隋大興城とは、その形態が共に横長の長方形である點で一致しているばかりでなく、その縦横の實長に於ても兩城は頗る近似しているのである。北魏の京師即ち大洛陽城が東西二十里南北十五里であつたことは、今まで何回も繰返した所であるが、長安城の方は如何かというに、宋敏求の長安志卷七によると、

外郭城。東西一十八里一百一十五步。南北一十五里一百七十五步。周六十七里。

とあつて、東西に於て一里半ばかり短く南北に於て僅か半里程長いだけである。その規模において兩城は酷似しているといわねばならぬ。そこで隋の大興城を造營するに當つて北魏

の大洛陽城に範をとつたのではないかと推測されるのである。時代も近いのであるから、これはあまり無理な推測でもなからうかと思う。たゞ兩城を比較する場合にまず注意すべきことは、北魏にあつては漢魏皆の舊城の規模を踏襲して内城を造營し、その後擴延して外城を構築したのであるから、内外城の間に十分一貫した計劃性を備えていないのに對し、隋の大興城では最初から計劃的に内外城が造營されているという兩者の計劃性の質的差異である。北魏洛陽城の内城に當るものは大興城内の宮城皇城區域であるが、兩城における内城の構造、機能、外城に對する位置關係などにみる差異は上述のことを示す適例であらう。

洛陽における内城は本來それ自體で國都の機能をもつたものであるから、その中には内廷外朝の外に民居をも許したところであろうが、外城のできると共に民居は次第に外城に移されて行つたろうかと思われる。大興城の内城^⑨が南北六里五十步、東西五里一百一十五步であつて、洛陽城のそれと比較すると東西において僅か半里短くなつているだけでほとんど同じであるのに、南北において三里以上も短くなつているのは

内城の機能が内廷外朝と官署に集中するようになったためにかゝる大幅の縮小が行われたのではなからうか。又洛陽城においては前述の如く外城が北方へはあまりのびられなかつたから、内城は外城に對して中央北寄りに位置することになつたが、大興城の場合内城の南北を三分の二ほどに縮小し、しかも外城の北壁にくつつけたため愈々北寄りの感を強くするのである。従つて内城の正南門より外城の正南門に至る街路は大興城では九里百七十五步^⑩に達し、北魏洛陽城のそれに比して二倍の長さをもち國都の威嚴を増すのに役立つたわけである。逆にこの街路——大興城では朱雀門街と呼ぶ——の効果を發揮するために、東西幅においては洛陽城のそれを繼承しながらも南北において大幅の縮減を行い、且内城を外城の北壁にくつつけたのではないかとさえ推測される。ともかく大興城の造營において北魏洛陽城を祖型としていることは掩えない事實であるが、内外城を一貫して計劃することができたために、その規模は一段と整えられ美しさと威嚴を増している。

次に都城の構成要素である里或いは坊について一言してお

きたい。洛陽城では前述の如く三百歩即ち一里四方の正方形であるが、大興城では朱雀門街の左右の夫々九坊のみが方三百五十歩であつて、それより東又は西するにつれてその東西幅が四百五十歩、六百歩という風にのびる。内城の南の大街以南は大體かゝる長方形の坊であるが、内城の東と西とは又又區劃がちがつて、東西六百五十歩、南北四百歩又は五百五十歩という形になる。大小不定ではあるが横長の長方形が卓越していてわずか十八坊の正方形は却つて例外と思われる。かく考えると大興城は外城、内城、更にその構成要素である坊までも横長の長方形で統一するように計劃したものといいうるのであつて、北魏の洛陽城が、外城は横長の矩形、内城は縦長の矩形、それを構成する要素としての坊は正方形という風に各様の方形が混在していると比較して頗る整備した美觀を與えている。こゝにも洛陽城が次第に成長して行つた痕跡をとめてゐるのに對して、大興城が洛陽城の規模を引繼ぐに際してその錯雜さを拂拭し、首尾一貫した計劃性を以て造營されてゐることが看取できるであらう。

四

更に兩城における市場の位置について考えてみよう。大興城においては内城の東南角外に都會市即ち唐代の東市、西南角外に利人市即ち唐代の西市が對稱的に設置されている。それに對して北魏の洛陽城の市場は如何であつたらうか。大市小市四通市の三市場があつたが、最も著名な市場は内城西面南頭第二門である西陽門の外四里、御道の南にあつた洛陽大市である。伽藍記卷四城西に周回八里というから方二里、四坊の地を占めた廣大な市場であつた。その東には通商・達貨の二里があり、南には調音・樂律の二里があり、西には退酤・治觴の二里があり、北には慈孝・奉終の二里があり、別に準財・金肆の二里があつて同種の商工業者が聚居していたことが知られる。退酤里の西が王子坊でその東西が二里あり、その西には張方溝があつて西郭をなしたのであるから、この洛陽大市は西城と西郭のほぼ中央に位していたわけである。南北線上の位置については、この大市が内城の西陽門より西出する御道の南に在つたという伽藍記の記述を手がかり

として考えることにしよう。西陽門は北魏においては西面四門中の北より三番目の門であるが、それ以前の漢魏晋では西面中央の門であつた。それで内城の北壁より四里半とすれば、外城の北面より計つて、五、六里のあたりにあつたかと思う。従つて洛陽大市の北邊も外城の北面より五、六里であり、大市の南北二里であるから、その南邊は外城の南面より七、八里であつたわけである。そこで轉じて隋の大興城における利人市の位置を見ると、この市場は西城と西郭の中央に位し、その北に四坊、南には七坊を數える場所に設けられていて、あたかも洛陽城における大市の位置に對應している。

更に興味のあることはその形と面積である。利人市は二坊の地を占めて方六百歩というから、洛陽大市が四坊の地、方二里を占めたのと殆ど同じい。兩市の位置と規模を對比すれば、利人市が洛陽大市を祖型としていることは殆ど疑問の餘地がなからうと思う。それでは更に洛陽城に大興城の都會市即ち唐代の東市の如く利人市と對稱的に同じ規模の市場が城東にあつたであらうか。伽藍記卷二城東によると、洛陽小市なるものが孝義里の東にあつた。孝義里というのは内城東面

の南の門である青陽門を東出して三里、御道の北にある里であつてその西北角には蘇秦の墓があつたという。洛陽小市はその里の東にあつたのであるから内城の東四里の地であつて東城と東郭との中央に位していたわけである。たゞその南北線上の位置は大市よりも少し南にあるから、城西の大市と完全にシンメトリカルであるとはいえないが、ますます對稱の位置にあつたといえよう。たゞ伽藍記にはその所在が記されているだけで、果してどれほどの規模をもつていたものかはわからないが、その名の如く恐らく小規模のものであつたろう。大市とは比すべくもない存在ではあつたが、北魏の洛陽城の東西にほぼ對稱的に設置されていたこの小市と大市とが、隋の大興城の造營計劃に織込まれて大市と同規模の都會市と利人市とになつたことは十分想像できるであらう。

因みに清の徐松の唐兩京城坊考のいう所によれば、朱雀門街以東には貴族高官の邸宅が多くて人口が比較的少なかつたために商業も不活潑で商人も次第に西市に集まることになり、東市の交易市場としての機能は西市に劣るものがあつたようである。洛陽小市の如き規模の市場でもよかつたかと思われ

微笑を禁じえない。しかし勿論造營の當初において豫見しえないことでもあるし、たとえ豫見しえても、もともとすべて

東西シンメトリカルに計劃する立前上市場のみを非對稱的にするわけにも行かなかつたのであるから、唐代の東市にみられるような形態と機能との不均衡が生ずることも亦やむをえない所であろう。因みに北魏洛陽城には上述の中市と小市の外に四通市と稱する市場があつたことが伽藍記卷三城南に見える。内城南面中央の宣陽門を出て南すること四里（前述の如く河南郡縣境界簿には五里という）で洛水に架した永橋に至る。この四通市はその南に立てられていたので一に永橋市ともいつた。伊水の魴、洛水の鯉などがこの市場で販賣されたという。この市場に對應すべきものが、隋大興城の計劃中に見出されないのは、或はこの市場が外城の外即ち郭外であつたためなのであろうか。

北魏の洛陽城と隋の大興城とは綿密に比較するならば、更に幾多の問題が見出されるであらうが、今はそれらに立入るひまもなく準備もできていない。本稿もこの邊で打留めるところにしよう。

あとがき

上來北魏の洛陽城に内城と外城とのあることを再確認しその規模を考察した序でを以て隋の大興城（後の唐長安城）との比較に及び兩城に幾多の類似の見出されることを指摘した。しかし兩城の類似については既に先人が指摘していることであつて、決して私の創説ではないことを、おそまきながら附記しておこう。この指摘は那波利貞博士の「支那首都計畫史上より考察せる唐の長安城」（桑原博士還歷記念東洋史論叢所收）が恐らく最初であらうかと思うが、そこで主として問題にされているのは、周禮考工記匠人の條にみえる面朝背市即ち宮が都城の正中にあつて朝（國家治事の處）がその南にあり市がその北にあるという中國の傳統的首都計畫が、唐の長安城では遵守せられていない。それ處か宮が中央北詰にあり市が南にあるという全く正反對のプランになつているという點である。そしてこのような反傳統的なプランが北魏の洛陽城に既に見出されることを指摘されているのである。^⑩これに對して私の場合は北魏の洛陽城から出發し、しかも

頗る初歩的な問題を起點にしてついに長安城との類比に及んだのである。従つて所論の力點がちがつており、そのため論旨に若干の異同が生じていることと思う。本稿では一々その異同についてふれなかつたが、有志の方は併せてかの論文を参看せられたい。

註

① 陽衡之の姓は普通には楊に作つており、史通や郡齋讀書志には羊に作つてゐるが、周延年氏の楊衡之事實考の説に従つて陽にするのが正しかろうと思う（神田喜一郎博士「洛陽伽藍記序割記」本誌九卷五・六號参照）。なお本稿（二五頁）に引用した河南志にも陽に作つてゐるが、必ずしも偶然とは言えなからう。

② 私の知る限りでは、後述の河南志の著者及び同僚水野清一君のみである。水野君は「洛陽永寧寺解」（考古學論叢第十號）の中で極めて僅かな言葉であるがこのことを明記している。

③ 「北魏洛陽城圖的復原」（中華民國々立中央研究院歷史語言研究所集刊第二十本）

④ 右批評（東方學報京都第二十冊）

⑤ ホワイト師の「洛陽古城古墓考」には東西六華里南北八華里といひ、晉の陸機の洛陽記には東西十里南北十三里という。いずれも考慮せねばならぬ説であるが疑を存するにとどめ、ここでは最も普通の説に従つておく。

⑥ 現在の洛陽伽藍記では南面には三門しかない。しかし四門あつた

ことは事實である。そこで現行の伽藍記の文を注意してみると

次西曰宣陽門

漢曰津門。魏晉曰津陽門。高祖因而不改。

という不可解な個處が見出される。恐らくこの二行の間に

漢曰苑門。魏晉曰宣陽門。高祖因而不改。

次西曰津陽門。

というふうな二行がもつたのであるが、宣陽、津陽の如き類似した門名でもあり、その説明文も亦よく似ているために脱落したものと考えられる。内容が今いうように三門であるにかゝらず、「南面有四門」と記しているのがその何よりの證據である。尤も現在校訂を経た諸本では、この内容に對應して四門を三門に改めてしまつてゐるが、古今逸史や漢魏叢書に収める伽藍記ではもとの姿をといめ四門に作つてゐる。それで本文では現行の伽藍記に従わず、あえて南面を四門として記しておいた。伽藍記を参照しながら拙稿を讀まれる誠實な讀者がいぶかれるかも知れないから一言辨じておく。

⑦ 前掲拙稿参照。勞氏は伽藍記の京師東西二十里南北十五里は九六城そのものであるとし、従つてそこにいう里は距離を意味する里即ち道里の里では不都合であるから閭里の里であると解釋した。それで東西六里を二十等分し、南北九里を十五等分した城坊即ち南北〇・六里、東西〇・三里ほどのちつぽけな面積が伽藍記の所謂里であると斷定したのである。誠に空前の解釋ではあるが全くえそらごとにすぎないことは、前稿にも述べた所である。

⑧ この書は「藕香零拾」に收められてゐる。徐松が永樂大典から抄出したもので、その中に金元の史實が含まれてゐるから一應元人の

作と考えられ、書名も元河南志となつてゐる。しかし宋の宋敏求の著した河南志二十巻があるので或いはそれに基き若干後代の記事を附加したものでなからうかと考えられる。

⑨ 北魏の首都と比較する便宜上、隋の大興城における宮城と皇城を併せた區域を假りに内城と稱したのであるが、宋敏求の長安志卷六によると宮城は東西四里南北二里二百七十步、皇城は東西五里一百一十五步南北三里一百四十步で、兩城を合した區域は縦長になるわけである。従つて三一頁にいう内城もそれを構成する宮城と皇城とが夫々横長の矩形であるという意味に解されたい。

⑩ 皇城南面中央の朱雀門より外郭城南面中央の明德門に至る幅百步の南北大街を朱雀門街と呼ぶが、その長さを九里一百七十五步と記しておいた。これは長安志によつたのであるが、⑨に記した如く長安志には宮城の南北が二里二百七十步、皇城の南北が三里一百四十步とあるから合せて六里四十步（唐の一里は三百六十步）、それを外郭城の南北一十五里一百七十五步から差引いた九里一百三十五步が朱雀門街の長さになるわけ、本文の、従つて長安志の九里一百七十五步は誤りということになる。だが宋の呂大臨の長安圖では宮城の南北を二里二百四十步としているし、新唐書地理志では皇城の南北を一千二百步即ち三里百二十步としているから、兩者を合すると丁度六里であつて、朱雀門街は九里一百七十五步ということになり、この数字も萬更誤りではないわけである。不審がられる讀者も少くないと思うので一言附記しておく。

⑪ この論者に對しては、山根徳太郎氏の「元大都の平面配置」（大阪市大文研究一卷二號）の如き反對意見も提出されているが、肯定者も少くない。駒井和愛氏の「中國の都城」（『日本古代と大陸文

化』に收む）や陳寅恪氏の「隋唐制度淵源略論稿」中の都城建築などがある。しかし何故か、反傳統的プランをもつ都城が出現したかに關しては各人各説が出されていて興味深い。那波博士がその因由を北魏胡族系の實行性に求められたのに對し、陳氏はむしろ河西即ち今の甘肅省西部、黄河以西の地方にいた漢族の役割を強調しているし、駒井氏はこれら兩説とは別の方面から假説を立て、いる。中國の宮殿の主要なものを太極殿と稱することが曹魏の頃から始まり、一方この太極が北極星のうちにあるように考え出されて來て、こゝに太極殿を中心とする宮城を城郭内の北詰中央に位する如く營もうとしたのではないかとするのである。

私はこれらの諸説にみるような「非連續」を考えるよりは、もう少し「連續」の面を注意する立場にある。本稿に述べたように、後漢の洛陽城より唐の長安城まで、互に因となり果となつて中國の首都は連續的發展を遂げたというのが、私のねらいであつた。その間、隋大興城においてこの外城を含めた大洛陽城に範をとりつゝ、内外城を一貫しての首都計畫が實施されたための整齊性とが注意に上る。これらは却つて今までの非連續説では言及されていない。本稿がそれらの諸點に對して何程かの寄與をなしうれば幸甚である。

（一九五一・一二・五稿）

逸周書作雒解と北魏大洛陽城

逸周書の作雒解は周の洛陽城建設の記録と伝えられるが、その規模を城方千七百二十丈、郭方七十里と記している。七百を六百の誤とすれば六尺が一步、三百歩即ち百八十丈が一里であるから、千六百二十丈は九里であつて、周禮考工記に國即ち都城が方九里というのとうまく合致する。次に郭——郭に同じ——が方七十里というのは額面通りに受取れば方九里の都城を包んで一邊七十里の正方形の外郭があつたことになる。しかしその後、「南は洛水に繋り北は邾山——北芒山——に因る」と明記してあり、しかもこの南北の距離は別稿でも述べたように大體十五里であるから、七十里というのはあまりにも過大である。それで王應麟の詩地理攷などでは敢えて之を十五里に改めている。藤田元春博士は或テクストに方七十二里に作つてゐるのを活かして次のような新解釋を施している。方九里は八十一方里、その中央の王宮を方三里として九方里、差引けば七十二方里となるから、郭方七十二里とは城の中の王宮を除いた朝、市、民店をさすものだろうというのである（尺度綜考三六八頁以下參照）。數字はつじつまがある。

うけれども、城と郭とで「方」の字の使用法が異なり、その上に城と郭との規模が同じことになつてしまふので些か不安である。孫詒讓は七と二を顛倒して二十七里にすべきだという。そうすると王宮が方三里、城が方九里、郭が方二十七里で夫々三倍ずつになつて頗る整然とする。恐らく之が原形であらうかと思うが、實際の地勢を無視したデスクプランであることは上述の通りである。ともかく「郭方七十里」は解釋しにくい難物であるが、今これを持出したのは新説を提供する意圖があつてのことではない。たゞ別稿中に何度も繰返して引用した洛陽伽藍記の「京師東西二十里南北十五里」から、北魏大洛陽城の周回が七十里であることがわかるので、「郭方七十里」の方の字にさへ目をつぶれば兩者合致して甚だ面白い。それで餘白のできたのを機縁に提起した次第である。それも敢えて逸周書をそのように解釋すべしと主張するのではない。ひよつとすると、北魏の大洛陽城を周回七十里の規模に設定する時、逸周書の「郭方七十里」を周回の里數としてこゝに範型をとつたのではないかと臆測するまでである。

The Plan of Lo-yang (洛陽) under the Northern Wei (魏)

Shikazo Mori

First of all the fact should be noted that the Lo-yang of the Northern Wei period had inner and outer cities, the former measuring 6 li east to west and 9 li south to north and the latter 20 and 15 li. The inner city was planned after those of Later Han, Wei and Western Tsin. It was in 501 A.D. in the Northern Wei period that the suburb was absorbed into the outer city. This fact, i. e., existence in the time of Northern Wei of the inner and outer cities, has hitherto been unnoticed. The author, then, makes comparison of Lo-yang with Ta-hsing under the Sui (Ch'ang-an under the T'ang). Between these two ancient capitals there were some essential differences due

to the fact that the inner and outer cities of Lo-yang was the result of spontaneous growth, while those of Ta-hsing was that of planned construction.